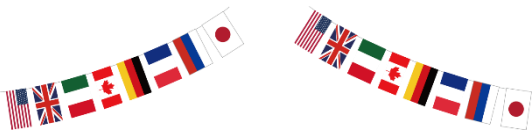


スポーツおじいさんにないたい！⑦



『マネーボール』
(ベネット・ミラー監督・2011)

國友万裕



1. 文句を言う女・文句を禁じられる男

久しぶりに行ったジェンダー関連の学会でテレビ局についての発表に参加した。若い大学院生の人の発表だったのだが、テレビ局はいまだに女性は25%しかいないことが示された。

それに対して、俺は質問した。

「私の教え子の男の子が東京のキー局のアナウンサーになったんです。彼は特別な教え子で、4つも私の授業をとってくれていたし、本当にたくさん話もした。一緒に食事もした仲だったので、彼の局のアナウンサーのインスタをフォローしているんです。そうすると、女性の存在感が圧倒的に強いんですよ。いいね！の数も女子アナの方が圧倒的に多い。だから私はアナウンサーは女性優位の世界なのかと思っていました」と。

この俺の発言に対して、後ろの方に座っていた若い女性がちょっと反発していたみたいだった。そして、はっきりとは覚えていないのだが、次のようなことをおっしゃったと記憶している。

「採用するのは男性だから、そういうことになるのだと思うんです。今、『女子アナ』とおっしゃったけど、女性のアナをキャピキャピしたふうに写真に撮ってアップするからいいね！が多くなるんだと思うんです」

彼女は「女子アナ」という言葉も差別だと思っているみたいだった。俺は単に女性のアナウンサーという意味で言ったことであって、男子アナとも言うから、差別とは思っていなかった。だけど、ネットでググってみると確かに「女子アナは親父が言い

始めた言葉だから、セクハラだ」と思っている人もいたみたいだった。

しかし、俺は、この時「また始まった」と思ったものだった。何故、女性自分たちの被害者の地位を必死になって守ろうとするのか。

おそらく女は所詮、装飾的な花添え的な役割をさせられると彼女は思っているのだろう。しかし、これは違っている。男だってアナウンサーなんかだったら、イケメンでなかったら採用してもらえない。俺の教え子だった子はお父さんがアメリカ人で超イケメン、野球部で体つきもガッチリしていたから、その点が採用の際に大きくプラスになったことは間違いないのだ。彼は自分のマッチョな上半身裸の写真を局のサイトに出したりもしている。男だって性的な見せ物にされているのである。

そもそも、全然、男を外見で判断しない女が世の中にいるのだろうか。女がテレビ局の中心になれば、不細工な男でもアナウンサーに採用してくれるというのだろうか。

それは絶対に違っていると思う。

俺が大学院の頃だ。当時、女子学生に人気のある男の先生がいた。その先生というのはまだ30代くらいで、イケメンで女性ウケしそうなタイプで、女の子たちはその先生にははっきり態度を変えていた。その先生の世話をするのが嬉しそうだったのだ。彼女たちの姿を見て、俺は他の男の先生たちに失礼だと思っていたものだった。その先生、自信過剰でちょっと気障なタイプで、俺はその先生に人間的な深みを感じなかった。おそらく男子学生に受けるというタイプではなかったのである。

教え子がアナウンサーになったことで、俺は他の男子アナのプロフィールも見てみたのだが、アナウンサーになっている男性たちは、やはり体育系が多い。これは明らかにスポーツができない男性に対する差別であり、是正すべきなのだけど、それは当然のこととして受け入れられている。フェミニストもそう言うのには文句を言わない。

教え子の女の子たちにジェンダーの話を振ると、大抵の子は「自分よりも背の高い男性がいい」という。もちろん、「それはあくまでも理想です」と彼女たちはいうのだけど、でも、「背の高い男性がいい」という心理を持っているというのは問題なのだ。自分よりも上の地位にいる男性、自分を庇護してくれる男性を女は求めているということなわけだから、男性差別なのである。

またほかのところで、こういう事件も起きた。

俺は来年出る予定の英語テキストでコラムを書いている。ルッキズムについてのコラムなので、今の男性がいかに見た目を気にするようになったかということを書いた。この頃は男性の脱毛も流行っていて、胸毛やすね毛のみならず、腋毛や陰毛まで全て脱毛して、ツルツルにしてしまう男子が増えていると書いたのだ。すると早速、女の先生からクレームが来た。「陰毛なんて書くと女の子の気分が悪くなる」というのだ。別にそういうコンテキストで書いたことではないし、大学生なんだからそれくらいはいいのではないかと俺は思ったのだが、彼女は譲らないので、その部分を削除することになった。

一つ一つのことは些細なことなのだが、

これだけ女の人からうるさく言われるとなると流石に腹が立ってくるのである。では、女性たちはどうなの？ 俺は子供の頃から女子から「気持ち悪い」と言われ続けて、それが今でもトラウマになっている。先日、西井開さん他の新しい本『名著でひらく男性学 〈男〉のこれからを考える』（集英社新書）を読んでいたら、他の男の人にも「キモい」と言われるのはひどく傷つくんだと言っている。なのに、女性たちは一向に「キモい」という表現をやめようとはしない。

女性がどれだけ大胆な格好をしていたにしても、挑発的なポーズを取ったにしても、セクハラはしてしまったら男の方が悪いんだとフェミニストは訴えてきたはずだ。そうであるのならば、俺がどれだけ気持ち悪い男であったにしても、「キモい」などという言葉で男性の悪口を言うのは女の方が悪いのである。

俺は、そのことをもっと女性にわからせるべきだと思う。男ももっと文句を言っていると思う。男の文句も女は受け入れるべきだと思う。ポストフェミニズム時代では女は「文句を言う権利」がある。だけど、男は文句を言う権利を阻まれるのである。

そういえば、男性学関連の研究会に行ったときも、いきなり、司会の人たちが、「女性、性的マイノリティの人を攻撃する発言はお控えください」とおっしゃった。

これは男性差別である。女性を攻撃するのはダメだけど、男性を攻撃するのは構わないと言っているように聞こえるからなのだ。

今は女性センターも男女共同参画センターと呼称を変えているし、映画サービスも

レディースデーはなくなった。名簿も男女の表記をしなくなった。男性差別に対する意識が少しずつ芽生えてきているのである。

それなのにいきなり、しかも男性性の研究会ののっけから、「女性」を攻撃するのはやめてくださいという前置きはおかしいと思う。「男性」であっても、安易に攻撃してはならないからだ。俺は弱者男性なので、その部分が気になって仕方がなかったのだった。

そんなことを考えているうちに高市早苗が日本初の女性総理になってしまった。

俺は最初は悪夢だと思ったものである。あんな右翼の人が日本初の女性総理だなんて……。しかし、よくよく考えるとこれで良かったのかも知れない。

俺がこれまでフェミニスト系の女性たちと接していて、腹が立っていたのは、自分たちは平気で男に文句を言うくせに、男が女を批判しようとする、「男の人は見えないう権力を握っているんですよ」とか「男社会ですよー」と話の次元を変えてこられることだった。俺は日常的なレベルでの男女関係のことを言っているのに、女に都合の悪いところになると社会の枠組みレベルに話を転化しようとするのである。

女は下位の者だから、文句を言う権利があるのだと彼女たちは思っている。「女は悪くない理論」「女は可哀想理論」である。しかし、実際にはそんな単純ものじゃないだろう。俺は、ジェンダーの問題は①社会レベル②個人レベル③心理レベルの3つの指標から考えるべきだと思っている。

社会の外枠のレベルで考えた場合は、男の方が権力を握っているケースははるかに

多い。しかし、個人レベルで考えた場合は権力を持っている男ばかりではないし、そういう男に使われている男の方が圧倒的に多いはずだ。そして何よりも心理レベルで考えた場合は、日本は男性よりも女性の方が幸せ度は高いということは色々なところで言われてきたことなのである。なのに、「男社会ですよー」という言葉で、何もかも男に責任転嫁できていると思うのだろうか。

でも、高市早苗が首相になったことでフェミニストたちも、もう「男社会ですよー」という言い訳はできなくなるのである。女性が日本の最高権力者になったのだ。これまで日本は先進国の中ではジェンダーギャップ指数が大きいことが問題になっていた。しかし、彼女が総理になったことで、この指数は大きく狭まるに違いない。

いよいよ、女性から被害者の権力を奪還する時がやってきたのである。

2. 男性運動から締め出された男 25 年目の真実

最近の一番大きな出来事と言ったら、かつて男性運動に関わっていた時に差し替えられた原稿が復刻本になって出るということである。

あれはもう 25 年も前だ。俺はあの時、自分の気持ちをどうすることもできなくてどん底だった。俺は 34 歳の秋から 36 歳の秋にかけて、2 年間たっぷり男性運動に関わった。

最初のきっかけは中村正さんの非暴力ワークだった。30 代から 40 代の男性ばか

り 30 人くらい集まって、男同士で手を繋いだり、あれこれ語り合ったり、それで 3 時間ほど過ごした。

勉強になるところはたくさんあった。ただ、俺がイメージしていた男性運動とは違っていた。俺はパートナーもいないし、DV なんてどうでもいいのだ。参加者のおじさんたちも普通のお父さんみたいな感じの人で俺とはタイプが違っていた。正さんのサイドにいた人も、古着屋でしか服を買わない、年収 100 万もない B さんとか、西成の労働者の C さんとか、俺が親しくなれるようなタイプの人ではなかった。

その中に 1 人、50 ぐらいのおじさん (A さん) が混じっていて、この人はその中では紳士的な人だった。話の仕方もソフトで、ちゃんとしていた。この人だったら、付き合えるかも知れない。そう思って、俺は男性グループに足を踏み入れることになったのだった。

そこで、俺はたまたま始動した雑誌のプロジェクトに関わった。俺はあの当時強迫神経症で、常に緊張していて、常に何かしていなくて心が落ち着かないような心理状態に落ち込んでいた。その強迫症がプロジェクトを進める上の起動力になったのだった。俺は会計役をすることになり、助成金をおろした。最初の頃は自分が尊重されていると言う感覚があって嬉しかったものだった。A さんやプロジェクトの知恵袋であった Y さんは俺よりも年上で、様々な勉強や経験を積んで来ている人だったので、あれこれ吸収できるものはたくさんあったのだった。

その一方で、プロジェクトに公募で集まった 30 人ほどのメンバーは次々に抜けてい

った。今思えば、あのプロジェクト自体が無茶だったのだ。いくつかのグループに分かれて、雑誌を細かく定量分析していくのだが、普通の人は続かない。大して楽しいわけでもないし、なんの報酬が出るわけでもない。ああいうプロジェクトは、大学にポジションのある先生が、自分のゼミの学生を使って、やっていくべきなのである。ゼミの学生たちだったら、先生の手前きちっとやってくれるだろう。しかし、ただ一般人で、大学関連者でもない人たちは、お互いに親しいわけでもないし、楽しくもないから、なんかかんかで抜けていくのだ。何らかの報酬が出るのなら話は別だが、作業をやらされた上にカンパ金まで払われるわけだから、自分たちは利用されているみたいな気持ちにもなっていくのである。

班長だった人が、1人また1人と抜けていく。するとその分の皺寄せは全部俺に来ていた。負担はどんどん重くなった。しかし、あの頃、自分の居場所が欲しかった俺は、Aさんの期待に応えるべく、必死で頑張っていたのだった。

ところが、次第に違和感が生まれていった。明らかにその男性グループの人たちと俺とではジェンダーに対する考え方が違っているのである。

また、Aさんはどんどん俺に対する要求をエスカレートさせていった。とりわけ、NHKのテレビに出された時は相当に怒った。俺は当時、精神状態がちゃんとしていなかったもので、テレビは困ると言っていた。しかし、半ば騙されたような形で出されたのだ。あれは35歳の夏のことだった。

そしてその後秋になって、故郷の弟が突

然死んだ。俺はその時点でプロジェクトにアップアップだったのに、そこに追い打ちをかけるように弟が死ぬということになり、ますますパニックに陥った。俺と弟は歳が離れていて、弟は20代の若さで死んだのだ。

しかし、これでAさんは俺に負担をかけてこないだろうと思っていた。こんな一大事の時に、いくらなんでもさらに負担を押し付けることはできなくなるだろうと思っていた。

ところが、である。Aさんは俺が弟の葬儀を終えて、関西に帰ってくるや否や、次はその男性グループの研究会で話をしてくれと要求してきた。「あなたはすぐに見返りを求めようとする。それを話すことで見つめ直せ」と言うのである。

俺はこの時は相当切れて、Aさんを叱りつけたものだ。Aさんは、それまでもどうにかして、俺をその研究会に出そうとしていた。しかし、俺はその研究会は嫌いだということはそれまで何度もAさんに訴えていたのである。

その研究会は個性の強い人ばかりで、行っても居心地が悪いし、むしろ疎外感を感じて、いたたまれなくなる。しかも時間帯が日曜日の午後なので、せっかくの日曜日が丸ごと潰れるということになるのである。しかし、Aさんは「あれは宿題が出ないから、ただ来て話せばいいのだから」となんとか俺に話をさせようとしていた。

これはだいぶ後になってわかったのだが、どうやら、Aさんは俺があの研究会を本気で嫌っていた理由がわかっていなかったのである。俺が最初に研究会に行ったとき、参加者の人同士の間でちょっとした喧

嘩が起きた。ある参加者の若い男性が、Bさんと今は大学教授になっているDさんに恨みを持っていたらしく、ちょっと陰悪なムードになったのだった。

Aさんはおそらくその男性のせいで、俺が研究会を嫌いになったのだと思っていたみたいだった。だからもう一押しすれば俺が出るだろうと思っていたのである。

しかし、そうではなかったのだ。

俺がああ研究会で嫌いだったのは、その男性ではなく、コアメンバーの1人であるCさんだった。Cさんは学生運動世代で、その前線で暴れていた人だった。そのため、悪気は無いのだろうが、ことあるごとに相手を吊し上げるようなものの言い方をするのである。

俺が今でも腹が立っているのは、当時参加していた非暴力のプロジェクトの話し合いの時に、「あなたは正しいとか間違っているという考えをするから」と吊し上げてこられたことだった。

その時点で、俺とCさんはほんの数回プロジェクトの席で一緒になっただけで、Cさんは俺のことなんて、ほとんど何も知らない。それを、まるで俺のことを知っているかのような言い方。しかも、喧嘩をするようなシチュエーションでも無いのに喧嘩をふっかけるような言い方。あれでは、闘争のための闘争なのである。

AさんはCさんよりも僅かに年上だし、Aさん自身も学生運動に絡んでいた人なので、ああいう言い方で他人を吊し上げることが当たり前の青春時代を送っていたのである。だから、ああいう言い方をされるのが、学生運動が大嫌いの俺の心をいかに傷つけるかということにピンときていなか

ったのである。

その後、Aさんと俺との関係は徐々に崩れていった。あれこれ起きて、翌年の夏、どうにか男性雑誌のプロジェクトは冊子を出せたものの、Aさんと俺は大きな亀裂を起こして、お互いを憎しみ合うようになっていったのだった。そして、決定的な決裂が秋に起きた。俺は完全にグループから村八分にされることになったのだ。

それからしばらくは、それまでの2年間を消化できずに悶々とした日々が続いた。それで切羽詰まって、Bさんのところにメールした。ちょうどその頃、BさんもAさんとの確執に悩んでいた頃だった。

そして、37歳の6月頃、そのグループのミニコミの原稿を書いてくれないかとBさんからメールが来て、早速書いたところ、それをAさんが差し替えるという事件が起きたのだ。それも表紙に書かれた俺の名前の上を一本線で消すという酷い差し替え方だった。

当時通っていた女性のカウンセラーの先生からは、「訴えたらどうですか。こんな差し替えの仕方をされたら、國友さんが期限通りに出さなかったからだと思われますよ」と言われたものだった。弁護士の先生に相談したところ、載せなかったことは訴えることはできないけれど、傍線で名前を消したことは訴えられると言われた。

その男性グループでも、このことを巡って、緊急運営委員会が開かれた。そして、Aさんの方に非があるという結論にはなっていたと聞いている。でも、その後、誰も俺に謝罪のメールは送ってこなかった。Aさんが処分されたわけでもなかった。もちろん、一旦出したミニコミを今更回収するこ

ともできない。男女共同参画センターには俺の名前が一本線で消されたミニコミが今でも眠っているはずである。

あれでは、運営委員会を開いた意味がないのである。

これ以上、詳しいことはここでは書くことができない。この後、その男性グループの人からインタビューを受けることになっているので、そこで詳しいことは話そうと思っている。ただ、俺の身の潔白を示すために、はっきり言っておかなくてはならないことは、俺はAさん以外のグループの人と喧嘩した覚えはないし、俺の方の事情を話したこともないということだ。

あれから早いもので、四半世紀である。

今回、復刻本が出ると聞いて、俺は差し替えられなかった分のミニコミを持っていたので、その分を元に戻して、復刻本を出すことになったのだ。25年たって、ついに幻の原稿が日の目を見るのである。

前に『天才作家の妻 40年目の真実』という映画があったけれど、それに据って言えば、「男性運動から締め出された男 25年目の真実」となる。

復刻本は11月に刊行予定なので、もし順調に行けば、この原稿がアップされる頃には、俺の幻の原稿は日の目を見ているだろう。やっと25年間のわだかまりがある程度は溶けるのである。

今はドキドキものだ。また何らかのハプニングが起きるのではないかという心配がよぎるのである。

3. やはりスポーツマンはいい。

最近になって、近所のマッサージのチェ

ーン店で気に入っている人ができて、その人を指名していた。ところが、この数週間、その人を指名しようにもアプリに出てこなくなってしまうているのだ。

他の人にやってもらうことにして、その人のことをちょっと訊いてみた。するとその人は大阪の方のチェーン店にいらしい。元々大阪の人で京都でもやってみたいというので来られていたみたいだ。

思えば、その人が勤めていらしたのはほんの数ヶ月なのである。だけど、俺のツボにハマる人だったので、ここ1ヶ月くらいは必ずその人を指名していた。他の人たちも俺がその人を気に入っていることはわかっていらしたみたいだった。

「じゃあ、もう京都は辞められたんですか」

「辞めるというのではないのかも知れないですけど、しばらく来られていないですね」とのことだった。

おそらくああいうチェーン店みたいところは登録制でシフトを登録しておいて、そこで日程が上手くはまればやってくれるということなのだろう。

なんとなく寂しい気持ちになったものだ。

「あの人、細かいところがわかってくれる人だったんですよ」

「あの方は、元々サッカーのコーチなんかしている人だったんですよ」

俺はそういう人が根っから好きなのかも知れない。前のマッサージの人はスポーツクラブのインストラクターで万能タイプだった。その前の東京に去って行かれた鍼灸の先生は、ラグビーをやっていた人だった。そして、その前のタイマッサージの人

は柔道かなんかの人だった。

マッチョな男の人に体を癒してもらおうと俺もマッチョになったような気持ちになるのだった。

11月、ほぼ1ヶ月以上ぶりにボクシングのジムに行った。トレーナーの元教え子が仕事が忙しくて、1ヶ月ほど間が空いてしまったのである。

久しぶりのボクシング。その日は他のお客さんが来ていなかったもので、俺は上半身裸になって1時間ほどトレーニングした。俺は自分が上半身裸になったりするのが合わないタイプだと思っていたので、子供の頃、それを強制されるのが嫌だったし、そういう欲望を抑えていたのである。

しかし、俺は、根はこういう体育会的なことをするのが好きな性分なのだろう。1時間ほど、上裸のまま、教え子にトレーニングしてもらい、その姿を彼のお兄さんが動画に撮ってくれた。楽しかった。

この動画をインスタに上げようかと思ったが、まだそこまではできない。インスタにあげるとなったら、女の子にも俺の裸を見られることになるからだ。そこまでは自信がないのである。でも、いつか堂々と上半身裸の写真をアップすることができる日が来ればいいなあと思っている。俺はやはりマッチョになりたいのだった！！

4.『マネーボール』(ベネット・ミラー監督・2011)

ブラッド・ピット主演の実話に基づく野球映画である。

と言っても、現役の野球選手を描くものではない。プロ野球を引退した40代くらい

の男が、プロ野球の古色蒼然としたやり方を変革していこうとする話である。そして、彼の相棒となるのがジョナ・ヒル演じる、頭脳派の若い男ということになっている。

ジョナ・ヒルと言えば、太ったコメディアンで、こういう真面目な映画に出ることは滅多にない。でも、彼をあえて起用したところがこの映画の味噌なのである。

彼は一見しただけでも、野球選手タイプの人には見えない。むしろ運動神経が鈍そうで、実際この映画でもオタク系で、自分は野球経験はないけれど、野球を統計的に分析する能力には長けている人物という設定になっている。

これは実話だから仕方がない面もあるが、やはり、オタク系の鈍そうなやつはスポーツマンにはなれないんだと思って悲しくなったものだった。スポーツ問題は男性にとってはものすごく大きい。男性の場合は、まずその部分で値踏みされる。いくら勉強ができて、運動神経ゼロのやつは主役にはなれない。三軍の男というレッテルを貼られる。

かつての俺はまさしくそういうタイプだった。この歳になってやっと上半身裸になって、トレーニングしても、周りの人から揶揄われないようなふうになってきたのである。

しかし、もう遅い。今頃になって、男として認められても、十分、自分の男の部分を楽しむことはできないのである。

スポーツ問題に取り組む。これから俺の就活はスポーツ映画と男性ジェンダーになりそうである。